

【終戦七十年に願う】

今年は何様ご存じの通り、終戦から七十年という節目の年です。時が経ち、先の大戦を語り継いで下さる方々も、年を重ねていく中で、年々少なくなってきました。そんな中で愕然としたのが、かつて日本とアメリカが戦争をした事実を知らない、あるいは信じられないという若者世代がいるという事です。学校はもとより、各家庭でも子や孫に語り継ぐ、そしてそれを受け止めるといった遣り取りが為されていない現状という事でしょうか。核家族などの事情があるにせよ、由々しき(忌々しき)問題であると重く受け止めなければいけないと思います。ここにお勧めの本があります。小学館から刊行されている「おじいちゃん戦争のことを教えて ―孫娘からの質問状― 著者・中條高德」。ぜひ一読をお勧めします。

昭和二十年八月十五日、「…堪えがたきを堪え、忍びがたきを忍び…」俗に言う玉音放送(終戦の詔勅)ですが、天皇陛下のお言葉がラジオから流され、戦争は終わりを告げました。当時の日本国民の皆様は、どう

いう気持ちで終戦を受け止められたのでしょうか?戦争を知らない平和な時代に誕生した私にとって、想像する事すら生ぬるいような惨めで、やり場のない憤りと共に、天皇陛下のお言葉を受け止められた事と拝察致します。そして、焼け野原からたったの五十年で、世界第二位の経済大国へとの上がった我等が祖先達の努力精進には、本当に頭が下がるわけであります。

この豊かさの礎を築いた祖先達の努力精進に裏打ちされた功績を忘れる事なく、繋いで下さった日本の文化と精神性をしっかりと胸に刻んで、今ある自分の尊い命を輝かせるという使命を預かっているのが現代に生きる私達であります。

テレビや雑誌などでは、外国人が「日本国、そして日本人は素晴らしい。大好き!」と口を揃えて賛辞を贈っています。日本から一步外国へ出て、外から日本を眺めると、その言葉の意味がよく分かります。日本は綺麗で、繊細で、相手を慮る国民性…。比較する対象があると、たちまち良し悪しが見えてきます。私も言いました、「物心両面にわたり世界標準の高い人間性を宿しているのが、他でもない日本人である。」そう確信しています。

《核兵器廃絶を願って》

四月二十五日〜五月一日まで、アメリカはニューヨークにある国連本部に行って参りました。何しに行ったのか?『核兵器廃絶』の署名書と、日蓮宗総長からの親書を国連本部の議長や事務局長へ提出する為です。また、ラスベガスにある「原爆博物館」への視察や、団扇太鼓を叩きながら「南無妙法蓮華経」と平和を願い唱えて歩きました。更に、ワールドトレードセンター(グラウンドゼロ)での追悼法要など、「日本宗教者代表团」の一員として参加させていただきました。原爆被害者国の人間として、加害者国の代表者に「ノーモア・ニュークリアー(nuclear)・ウエポン」核兵器反対」を強く訴えてきました。戦勝国アメリカは、原爆投下をはじめ、先の戦争について好き勝手な解釈をしており、我等アメリカは「善」であり、敗戦国である日本国は何もかも「悪」であると明確に位置づけていました。これは「キリスト教」が信仰の中心にあるアメリカ独特の解釈なのかもしれません。聖書の信仰形態は「神様と悪魔」の二極化で話が終始します。なので、どちらか一方が「神様(善)」で、もう一方が「悪魔(悪)」という単純な話になるのです。

ところで、ただ口先だけで「戦争反対」を叫ぶだけでは、真の平和は実現しません。戦争は私達各々の心の中に潜んでいます。自分本位な生き方を改め、まずは家族や周囲の人々と温かい関係(強い絆)を構築していく。私達には共に生きるという共同意識が必要です。ただ私達には「生きる」という本能があり、ややもすれば自分さえ良ければそれで良いという矛盾した意識に苛まれます。これを解決する為にも道德意識を持ち、宗教心を養わなければいけません。

《戦没者を慰霊する》

最後に、世界各地から結集した四団体の聖職者で行われた『多宗教合同礼拝』の感想文を、「日本宗教者代表团」の代表として依頼されたので著しました。今月号は、その文面を掲載して結びと致します。(以下感想文)

平成二十七(二〇一五)年四月二十六日、アメリカはニューヨークの国連ビルすぐ横に位置するJCHチャーチセンター礼拝堂において、「多宗教合同礼拝」が開催された。テーマは「核のない平和で、公正で、持続可

能な世界への動員」と題して、様々な宗教全十四団体（※団体名は文末に記載）が全世界より結集し、各兵器の犠牲になられた御魂に対しての慰霊追悼と、平和で安全な世界を祈念した。

五年に一度開催される今年、私は日蓮宗「立正平和の会」として、「日本宗教者代表団」の一員に交せて頂き参加した。

昭和二十(1945)年八月、広島と長崎に投下された原子爆弾により、一瞬にして廃墟と化し、数多くの尊い命が奪われた人類史上最悪な忌まわしい歴史がある。核兵器の問題解決には根強いしがらみの歴史があるとはいえ、その被爆国である我等日本人と、原爆を投下した米国の現地市民や各宗教の代表団がインターフェイス、人種や宗教の壁を越えて七十年後に一所に集まり、核兵器廃絶を誓い、世界の平和を願い、諸宗教合同で人類最高の祈念ができたことに何より大きな意味があると思う。

思えば、被爆者が「核兵器の無い世界」を訴え続け、早くも七十年の歳月が流れた。しかし今、世界の核兵器はどうなったのでしょうか？核兵器を巡る現状に、暗(あ)澹(たん)たる

た思いを抱かないではいられない。

核兵器廃絶に向けた唯一の国際条約である「核不拡散条約(NPT)」体制を構築したにもかかわらず、核保有国は責務であるはずの核軍縮に真摯に取り組むことなく、新たな核保有国が出現する始末。核兵器の被害は過去のものではなく、今この時も、心身共にその人生に消せない傷を抱えている被爆者が世界には大勢いる事を認識しなければならぬ。

私達宗教者は、被爆者の怒りと悲しみを真摯に受け止め、持てる力をふりしぼって「原子爆弾による悲劇が二度と繰り返されることのないよう、もう誰にも同じ苦しみを経験してほしくない」というメッセージを発信し続けていく責務があるでしょう。と同時に、核兵器廃絶に向けて、私達一人一人が、自分に何ができるかを真剣考え、そして行動実践しなければならぬ。当たり前のことだが核兵器が存在する限り、核爆発の危険がある。人類が滅亡する前に、核兵器を廃絶しなければならぬ。ここに、全ての核兵器廃絶こそが、立正安国という平和で安全な世の中を創造する大きな一歩になるという事を確信する。

かつて原爆の災禍を経験した我が国

日本だからこそ、世界各地に向けて核兵器廃絶を発信する事の意義と説得力があるものと思う。

さて、チャーチセンター礼拝堂での多宗教合同礼拝では、「世界の平和を私達は願います。命に合掌 日蓮宗」と書かれた大段幕が最前列に掲げられ、各宗教がそれぞれの信仰に敬意を表し、共に祈り、共に表現し、共に声明を発表し合った。まさに宗教が目指す共生の世界、法華経で説かれるところの靈鷲浄土の世界を垣間見る様だった。日本宗教者代表団の祈りでは、寿量品を唱えた後、大音声のお題目の声に合わせ、団扇太鼓が教会内に轟いた。シーンと静まり返った教会内には、お題目に宿る経力と、戦争犠牲者の御霊が感応道交し、まさに安らぎの世界に導かれたかの様な感動を抱いた。この感動と経験が、自分達だけの一過性の打ち上げ花火で終わっては意味がない。過去の歴史の上に、今の自分の幸せがある事を認識し直し、今後は各兵器廃絶、立正安国の名の下に、一人でも多くの同志の輪を広げ、核保有国が無くなるよう祈り続けるのが、私達宗教者に課せられた大きな使命でもあろう。

最後に、戦後七十年を迎えた節目の年に、日本宗教者代表団の一員として、

多宗教合同礼拝に参加させて頂けたことに心からの感謝を申し上げます。

合掌 谷川 寛敬

(※参加十四団体)

- 日本宗教者代表団
- 日本山妙法寺
- 国際連合チャーチセンター
- ザハウス・オブザ・ロード・チャーチーズ
- ヒンズー教
- ユダヤ教
- ユナイテッド・リリジョンズ・イニシアチブ
- メノナイト教会
- ユニテリアン・ユニヴァーサリスト協会
- 聖ジョージ・エписコパル教会(米国聖公会)
- バックス・クリステイ・メトロ・ニューヨーク
- プレスビテリアン派ピースフェローシップ
- フェローシップ・オブ・レコンシリエーション
- グローバル・セキュリティ・インスティテュート

